

1 生と死のパラドックス 1 -

- おほよそ己が生命を全うせんとする者は、これを失い、失う者は、之を保つべし。
聖書ルカによる福音書 17章33節 (文語訳)
- その心得はまず我が心を自ら切り落とすのである。死にたくない、打たれたくないという我が心を切り落とすのである。

小野派一刀流極意 「一つ勝 / 切り落とし」

講座の第1回として典型的なパラドックスを考える。緒言で触れたように武術は戦乱の時期を経て、江戸時代に入り、比較的平和な時代を迎える。この時期に各流派の宗家たちは時代に対応した改良、進化を考え、武術を武道へと昇華させた。これは「だれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない、もしそうすれば、ぶどう酒は皮袋を破り裂き、そして、ぶどう酒も皮袋もむだになってしまう」(マルコによる福音書2章22節)に通ずる。

剣道には「剣」と「道」という字があてられる。また剣術、剣法などという呼称も一般的には同じ意味に解されているのではないだろうか。しかし道、術、法にはいささかの違いがあるように思える。日本文化においては術や法よりも道が好まれる傾向にあるように思う。嘉納治五郎は柔術を柔道とし、その理念を「精力善用」「自他共栄」とした。やはり殺伐とした格闘技の技術習得から、精神世界の高揚へと昇華させたのである。同様に書、花、茶、香なども全て道とし、その道の中に諸流派を形成している。剣道も、剣術・剣法という技術的な側面を強調した言い方から道へと昇華してきたのである。もちろん術・法という面も修行上大切な要件ではあるが、それらの修行を通してさらにその奥義に達するには、やはり道という概念が適切なであろう。

文語訳聖書、ヨハネによる福音書の冒頭は“太初に道あり、道は神と偕にあり。道は神なりき。(略)之に生命あり。この生命は人の光なりき。光は暗黒に照る”とある。先人達が翻訳に際し、苦心し「道」とあてた語は 'logos' という単語で、ギリシャ語の λόγος (ロゴス) からの借用語である。O.E.D.には word / speech / discourse / reason が原義とある。それぞれ、言葉 / 会話 / 言葉による思想伝達 / 理性という意味である。剣道や柔道などの道と、聖書に言

う道とを全く一如にはし得ないけれども、その求める所は相通ずる所が多い。

己が生命を愛する者は、これを失ひ、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠のいのちに至るべし“(ヨハネによる福音書 12:24～25)は有名な聖句であるが、「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め」つまり「殺人剣」の気位とは大きく隔たる。

* 第1回課題：小野派一刀流極意の該当部分(pp.112-118/pp.429-430)を読んで、「切り落とし」の教える所をまとめなさい。

2 生と死のパラドックス 2 -

- 自分の敵を愛し、迫害する者のために祈れ、

聖書マタイによる福音書 5章44節

- 「活人剣／^{まるばし}「**転**」敵の好むところに従って勝つ、

柳生新陰流

- 一刀兩段

柳生新陰流

柳生新陰流にいう「転」「活人剣」は「敵の好むところによって勝ちを得る」のが極意であるが、この敵の好む状況を作り出す手だてとして、ほとんど唯一絶対といえる手段が、敵を愛する、敵と和するという他にない。「三学円之太刀」の一本目「一刀兩段」では、まず使太刀が車(八相に似ている)に構える。敵に対して無防備に全身を^{さら}晒すため、自己を生死の狭間へ置く、勇氣と、自己のすべてを捧げる心が要求される。柳生十兵衛三蔵は著作「月之抄」でこの心境を「棒心」と説明している。ちなみに日本剣道形は十本ともすべて仕太刀が先に技を出し、打太刀が勝ちを納めるものである。つまり「**先**前之**先**」は一本もない。先前之先とは自分中心の剣道を言う。自らの術や法、あるいは筋力や瞬発力に頼り、結果論として勝敗を決しようという姿勢である。現代剣道における試合にあっては、特に初心者や、低レベルの試合によく見かける光景である。剣道形も昇段審査ように手順だけ覚えるのではなく、十本それぞれの剣理をしっかりと吟味しつつ行うべきである。

「道」という言葉から我々は時間的な概念を連想する。志道をもって遠き道

のりの端についてから紆余曲折しながらも、それぞれがそれぞれの修行道を歩むこととなる。一直線に歩んだとしても相当に遠き終着点（実はこれが無いのだとも思えるのだが）を目指すのである。凡庸な者は、停滞し、横道にそれ、脱落することもしばしばある。“誘惑に陥らぬやう目を覚まし、かつ祈れ。眞に心は熱すれども肉体はよわきなり”（マタイによる福音書 26:41）

「いっとうりょうだん」という言葉を耳にしたとき、我々は普通一刀両断の漢字を頭に浮かべ、「有無を言わず、圧倒的に攻め、真二つに切る」というような意味を思うのではないだろうか。これは宮本武蔵のいう「巖の身」である。柳生新陰流では一刀両段という字を当てている。この段は「段取り」の段で、その意味は、「一刀のもとに彼我共に截断する位」と言う意味だそうである。勝負にあたって、我だけの段取りを組めば、相手との拍子がなく、従って拍はずれになってしまう。それでは必勝は期せない。例えば出小手が決まるということにおいても、面に出てくる相手の距離、スピード、拍子、とこちらの小手に押さえるそれらとの両方がピタッと合って、始めて見事に決まるのである。よく「ここで面に出てくれたら、小手に押さえられるのに」などと思うことがあるが、それは一刀片段である。そして直後往々にして、こらえきれずに、脆弱な打ちに出て尽きたり、また気後れして下がり虚を作り、相手に打たれてしまうものである。常に双方の段取りが合うように図らねばならない。相手の気持ちはままならぬもので、自分の意志だけではどうしようもない、相手との関わりにおいて、こちらの気構えとして大切なことは「懸待一致」の念であろう。懸待一致は動中静であり、静中動であると説かれる。パラドックスのようで一件矛盾があるように思えるが、「体が動作を起こしているときには、心は静寂でいなければならず、体が動作を起こしていないときは、心は相手に働きかけていることが肝要である」くらいに解してはどうか。

勝負は一瞬である。その一瞬に何を求めるか。最も大切な所である。三学円之太刀の一本目、一刀両段の最初の手順は前項で述べたが、術の決まる瞬間はどうであろうか。「打太刀は間合いを詰め、太刀を雷刀(上段)に取り上げるや否や一調子に使太刀の頭へ真っ直ぐに截り込む。使太刀はこの截込を見て取り、車の太刀をそのまま真向う上段に取り上げながら、自身の人中路を敵の人中路に正対させるや否や、天地を截り徹す盛大之気をもって、自身（敵ではない）

の人中路を真っ直ぐ一拍子に合撃する」とある。小野派一刀流組太刀一本目「一つ勝・切落し」では「打方の打ち下ろす太刀に構わず、進み出る車輪前転の心得で打方の真正面をさらに大きく強く、気合いを満たして打ち下ろす。」「その心得はまず我が心をみずから切り落とすのでなければならない。我が心を切り落とすというのは死にたくないとか打たれたくないという我が心を切り落とすのである」とある。ともに懸待一致の妙があって初めて実現できる術の執行である。

* 第2回課題：「生命知としての場の理論」の該当箇所(pp.145-186)を読んで柳生新陰流にいう「活人剣ノ転」の剣理を理解しなさい。また「十文字勝ち、合撃」と一刀流「一つ勝ち」の共通点を考えなさい。

3 生と死のパラドックス 3 -

- 一粒の麦がもし、地に落ちて死ななければ、それは一つのみです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分の命を愛する者はそれを失い、この世で、その命を愛する者はそれを保って永遠の命に至る。

聖書ヨハネによる福音書 12章24～25節

- 妙剣は「木」^{かたど}の初めは切っ先を秘して隠剣に構える。木の種子を深く土中に蔵する所である。自らの肩に隙を見せ、相手に自分の命を捧げる気位を持つ。

小野派一刀流極意 「高上極意五点」一 妙剣”

小野派一刀流 「高上極意五点」の一、妙剣は「無形、無無形、無我、無敵、妙者無相也」とし、仕方は隠剣（脇構え）に進み、打方に自分の左肩を隙いて見せる。つまり我が命を相手に投げ出しているのである。「もし死なば、多くの実を結ぶべし。己が生命を愛する者は、これを失う」の心境を求めているのである。人はこの境地にはなかなか至れない。そこが修行である。自分をこの境地に至らしめ、さらに敵が「己が生命を愛する」レベルにあらば、敵はその好むところに従って、必ず、肩越しに切り込んでくる。つまり、敵の意志の確定がある。そうなれば「後の先」で必勝を上げることができるのである。しかしその実は「先々の先」の勝ちである。従ってまず始めに心のなかで養うべき「先」とは「愛と和」に他ならない。打方である師は仕方をその心境に導く指導をな

さねばならない。剣道の究極の姿は、竹刀を交える双方がこの境地に至ることである。また仮に双方この境地に至れば、ただただ静寂の中にお互いの剣先の触れ合いを通して、心を楽しむ剣道となるであろう。

小野派一刀流 真剣一土

真剣の構えは、常に真ん中です。土は中であり、すべてのものが中って（あたって）帰るところです。空中に投げられたものは、全て土に戻り、土に中ります。一切のものを生じ、育て、発し、集め、帰し、蔵するところです。聖書（創世記）が告げるように、人は土で作られ、土に帰ります。

土は季節の用語でもあります。季節の変化の真ん中が土用です。土用の前後には季節の変化があり、それを押さえ、鎮^{しず}めているのが真ん中、土用です。また土用とは、土の中の死を破って土の中に生命を開く事をも意味します。地の中は死の世界でもあります。蒔かれた種に命を与えるように、死に命をもたらすところでもあります。イエス様は十字架の後三日間墓の中に葬^{ほうむ}られました。しかし地の底の死と虚無^{きよむ}を破り甦^{よみが}えられました。死の世界を、命の世界に変えられたのです。一粒の麦のたとえのように信仰とは死ぬ事によって、新たな命、より多くの実りをもたらす逆説の世界なのです。そして、武道の精神もまた死ぬ事によってその意味を完成させるものなのです。武士道とは死ぬ事と見つけたりとは、このことを言っているのです。

*** 第3回課題：小野派一刀流極意を読んで「妙剣 / 真剣」(pp.247-249/pp.253-255)の教える所をまとめなさい。**

4 キリストの愛と武道の愛

- 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛せ、

聖書マルコによる福音書 12章33節

- 完全な愛は恐れをとり除く。恐れには懲らしめが伴い、かつ恐れる者には、愛が全うされていないからである。

聖書ヨハネの第1の手紙 4勝8節

- 相手に我が心をすべて捧げよ、

柳生十兵衛三厳 「月之抄」真^{ほん}の棒心”

柳生新陰流にいう「棒心」は「相手の心はその拳に表れる。従ってよくよく相手の手の内つまり「手裏」を見よ」と言うものである。確かに自分が対峙しているとき、相手に対して様々に先を仕掛け、また迎えを駆使しようとしているのであるが、その心の作用をまず兆すのが手の内であり、足の運びであることが自覚できる。それを相手を見ることに当てはめて考えてみると、この棒心の起こる手の内を観の目で見ることが肝要であると気づく。しかしながらこの実践は非常に難しいことは経験から容易に理解しえる。格下の者を使って稽古をしているときにはこれができているのである。先を掛けるにせよ、迎えを駆使するにせよ、それに対する相手の棒心が手の内に表れた所が察知できる。これがあるので先々の先の攻めが有効に働いていることが自覚でき、後の先で勝ちをおさめるなり、居着いたところを楽に攻め込んで打つなり、または気前を一方的に打てるのである。それでは上手の人にこれをどうすればできるのであろうか。まずは心を安らかにすべきである。また心と体（構え）は表裏一体であり、正しい構えなくしては心のゆとりなど生まれべくもない。この境地は稽古を通じて養うより他ないが、それとて単に時間的に稽古をこなしたからとて向こうからやってくるものではない。やはり意識を持って稽古にいそまなければ成るものではない。さらに相手との掛け合いの中で、この対備えと心備えが一貫して良い状態で継続し続けることが、最良であるが、これは誰にとっても至難の事であろう。目指すべきは、一瞬でも長く繋いで行こうとする努力を怠らない事である。前後際断、念に執着することなく、正念相続を心がけることである。

剣道時代 2000 年 8 月号柳生新陰流（下編）の記事の中に次のようにある。

柳生新陰流には「三ヶ棒」という考案がある。「危ぶむ心」「打ってやろう截ってやろうという心」「打ち防いでやろうという心」をすべて敵に捧げよ、との謂いである。懸待表裡、一隅を守らず。流祖上泉伊勢守が截相の本質と認識したまことに革新的な剣理である。敵の動きに随い無理なく転変して勝つ「活人剣」の本旨である。延春宗家は「上泉師は『懸、懸に非ず、待、待に非ず』こう道破されていますが、たとえば三学圓之太刀は待の動きに則って、しかも心は懸であれというのが眼目であって、そうでなければ截相というきびしい状況にあって、勝をおさめることはできません。きわめて平易簡潔に申しますと、

截相に求められるのは、主導権をいかにして自分が取るかということです。これはルールの上に乗ってスポーツ性を重視した剣道 現代剣道でも、ほかのスポーツでも、実業などの世界にも当てあまることだと考えます」

と述べられている。

同誌同号に小野派一刀流禮楽堂の道場開きの記事も見えるが、一刀流切り落としの説明を笹森宗家は「この技は、相手が仕掛けてきたところに我が応じて行くのであるが、応じていきながら先を取り上太刀を取って勝つのです。それを一拍子の相打ちと説明してきましたが、相打ちの中に先の理合が含まれるのです。ここで修行すべきことは、勝たねばならぬ、とか負けてはならぬとか思う自我を切り落とすのです。勝っても、負けても、それが自分自身であると認識できる己本来の姿になりましょう」というのが切り落としの稽古の目的であると述べられている。さらに一刀流の極意として「一刀流では鋭さや、強さよりも、柔らかさ、円やかさを教え、如何に勝つより、如何に負けるかを学びなさい。剣の術を学びて剣をいかに捨てるかを学びなさい。信仰、学問、武道、芸術でも我こそと肩をいからせている間はまだまだ未熟なのです」と話されている。

日本を代表する2大流派の到達した所が表現の仕方こそ違え、同じところを説いているのである。

* 第4回課題：上記指導書並びに

参考資料2 剣道時代 特集 「愛の剣道」 剣の心と愛、 聖書 ローマ人への手紙 12章9～23節を読み、愛の諸相と聖書の説く愛及び武道における愛について自分の意見を述べなさい。

5 愛と礼

- 愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません、愛は自慢せず、高慢になりません、礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばず真理を喜びます。

聖書 コリント人への手紙 第1 13章3～5節

- 礼は寛容であって、人の利をはかる。礼は妬まず、誇らず、たかぶらず、非礼を行わず、自分の利益を求めず、軽々しく怒らず、人の悪を思わない。

礼儀はもし上品でないと思われることを恐れるだけで実行されるならばそれは徳とはいえない、まことの礼儀は他人の感情を察する同情的な思いやりが外に表れたものである。

新渡戸稲造 「武士道」 ”礼”

- 剣道稽古に必須な礼儀という正しい形式によって真心が養われ、真心によって正しい礼の形式が修められる。真心のない形式は虚礼であり、形式の正しくない表現は失礼である。

小野派一刀流極意

剣道は「礼に始まり、礼をもって行い、礼に終わる」と。しかしてこの礼の本質とは何か。先達の言葉を引くのが一番良かろうと思う。

新渡戸稲造は名著’BUSHIDO-The soul of Japan / 1899(明治 32)’において、’We may reverently say, politeness “suffers long, and is kind; even not, vaunteth not itself, is not puffed up; dose not behave itself unseemly, seeks not her own, is not easily provoked, takes not account of evil.’ 「礼は寛容であって人の利をはかる。礼は妬まず、誇らず、たかぶらず、非礼を行わず、自分の利益を求めず、軽々しく怒らず、人の悪を思わない」と。これは聖書の言葉の「愛」を「礼」の一字に替えたものである。新渡戸は西洋の人々に向かって日本人の持つ礼の本質を「愛」に限りなく近いものだと紹介している。さらに原英文は省略するが、「礼儀はもし上品でないと思われることを恐れるだけで実行されるならば、それは徳とはいえない。まことの礼儀は、他人の感情を察する同情的な思いやりが外に表れたもので、正当なものに対する尊敬、ひいては社会的地位に対する公正なる尊敬を意味する」「小笠原流宗家小笠原清務の言葉によれば、『礼道の要は、心を訓練するにある。礼をもって正座すれば、凶刃が剣をとって立ち向ってきても、害を加えることができない』ということにある。言い換えれば、絶えず正しい礼法を修めることによって、人の身体の、全ての部分と機能は完全に整えられ、身体とそれを取り巻く外部の環境とがまったく調和し、肉体に対する精神の支配を表現するに至る」と述べている。

『一刀流極意』(笹森順造著)には「剣道稽古に必須な礼儀という正しい形式によって真心が養われ、真心によって正しい礼の形式が修められる。剣道の稽古に当たっては必ず自ら慎み人を敬う真心を端正な姿と動作で表現するのであ

る。真心のない形式は虚礼であり、形式の正しくない表現は失礼である」とある。

例えば平素の稽古において九歩の間から一礼し、三步あゆみ蹲踞する。そこから立ち会いが始まるわけであるが、それは手順を追うだけの虚礼であってはならない。上記にあるように「礼法の要は心を訓練するにある」のだから、蹲踞の段階に至るまでの三步の出で、すでに心胆が練られていなければならない。多くの高段者がその重要性を説いている。蹲踞の段階ですでに気が充実し、さらに相手の上に気が乗り、それを相手に伝えるような意識を持って臨む事が肝要である。上位の方に願うのであれば、その方の動きに一瞬遅れて追随することも大切である。先生・先輩にかまわず自分だけでさっさと蹲踞したり、また稽古・試合後相手がまわらず納刀したりすることはもってのほかである。「他人の感情を察する同情的な思いやりが外に表れたもの」という言葉を再度吟味すべきである。例えば高齢の先生や、膝などに故障を抱えておられる方に稽古を願うとすれば、普通の様には蹲踞が叶わない状況にあるかもしれない。しかし相手方の十分な立ち会いの準備ができるのを待ってから稽古願うのが礼儀というものである。さらに「相手の感情を察する」ためにはしっかりと相手の目を見なければならない。感情が最もよく表れるのは目である。またこちらも目を通して、相手にこちらの心境を察してもらわねばならないのである。

*** 第5回課題：新渡戸稲造「武士道」の第6章 礼儀 を読み、なぜ礼儀が普遍的勝利に繋がるのかを考えなさい。**

6 道程

- 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。

聖書 ローマ人への手紙 5章4～5節

- 誘惑に陥らないように、目を覚まして、祈っていなさい。心は燃えていても、肉体は弱いのです。

聖書 マタイによる福音書 26章41節

- 一刀流の執行(修行)の要諦はこの生死の分かれ目を出入馳駆しながら、生死の速逸を取り極めて日常心根体技に励み鍛えることである。我欲の重荷を背負う罪人に

は極楽は百万億土の遠いところにあり、すべてを^{ふつしよ}払捨し捧げて身軽な聖徒には天国がすぐ近くにある。

小野派一刀流極意

■ [1997 年度前期宗教週間笹森 建美宗家のメッセージ]より抜粋

キリスト教と武道の接点になるいくつかの考え方を取り上げたいと思います。「青春輪舞」を読んで、私も教会を始めた時の初心に帰らなければと思いましたが、まずこの「初心」という事に触れたいと思います。

よく、初めからやり直すつもりで、心新たに物ごとに当たる時、「初心に帰るつもりで」と言います。また、やり始めた物事を心変わりすることなく最後までやりとげる事を「初志あるいは初心を貫く」と言い、物事が順調に進んでいる時、調子に乗って思わぬ失敗をしないように戒める時、「初心を忘れずに」とか言います。

例えば、新しい年を迎える度に、私たちは「今年こそは、勉強しよう。」と決心をしながら、年終る時、結局は途中で^{くじ}挫けてしまったり、横道にそれてしまった自分を見だし、情けなく思い、後悔する事があります。

私たちが物事を始めようとする時は、新鮮な思いに満ち、希望を持ちまた素直な初々しさを持っているものです。たぶん私たちの心の問題、精神的な生活においても、同じ事が言えます。キリスト教に触れ、神を求めようと思いだした時は、新鮮な、素直さに包まれていたのに、時が経つにつれて、成長するのならいいのですが、立ち止まったり、逆の方向に向かってしまう事がしばしば起ってしまうのです。

信仰にとって大事な事は、初めの時の、純粹さ、素直さ、新鮮さ、そして初々しい驚きを持ち続ける事です。主イエスは、「幼子のような信仰を持ちなさい」と教えておられますが、その意味は、「余計ないろいろな事を考えすぎて、色のついた、よろよろした信仰ではなしに、素直な、まっすぐな、上に伸びていく信仰を持ちなさい」という事だと思います。

さて、「初心」という言葉についてもう少し考えて見たいのですが、実は武道、剣道の教えでは奥義に到達するいくつかある段階の一つが「初心」です。

突然話は変わりますが、私は20年ほどキリスト教学校の宗教主任を勤め、聖書の授業を教えていました。ある時生徒から手紙が来て、「先生の絶妙な授業を楽しみにしています。」と書いてありました。「絶妙」という言葉をどうい

意味で使ったかは分かりませんが、それを見た家内が「これはごまの擦り過ぎだ。」と言い、私は「そんな事はない。まだまだだ。」と、やり取りをした事がありました。

良い授業だとか、分かりやすい授業、面白い授業とかいうのならともかく、「絶妙な授業」と言われても、果たしてどんな授業なのかぴんと来ないかもしれません。そこで「絶妙」とか、「初心」とかどんな意味合いがあるのか説明を加えていきたいと思います。(少し、理屈っぽくなりますが、辛抱して聞いて下さい。)

武道の奥義の言葉として、「居、合、行、表、次、序」という教えがあります。一つ一つ詳しくはお話しませんが、「居」とは、自分の今、居る場所、何処に居るか、どんな立場なのかを弁える事、「合」とは、相手の立場、状況、環境に合わせる事、ここから、いわゆる「居合」という言葉が出てきます。(居合とは剣の技の、初めの一段階だという事です)。

「行」とは、居と合を行う事なのですが、それは力であり、所作、動作の形であり、実態があるけれど見えないものです。つまり物の重さのようなもので、重さというものは、実態はあるが形のないもので、それを知る一つ的手段として秤があるように、「行」を形にするものが「表」、表れです。

その表れ、表に「次」、つまり次第、順、段階、があるという事です。そしてその次第は「序」によって示され到達するという事です。

「序」とは、もともと「堂」の東西の^{しず}詰めを意味し、区別あるいは違いを認識するという事から、「品節」を意味するようになります。聖書でいう、神と人との違いを知ることによって、神を^{おそ}畏れる^{けんそん}謙遜、そして、品節ある信仰が生じてくるという教えに通じるのです。更に、この「序」にも段階があって奥義に到達していきます。そして、「絶妙」あるいは、「^{せいみょう}精妙」という言葉は、「居、合、行、次、表、序」の、「序」のところに当たる次第、つまり段階の中に出てくる概念なのです。

剣道では、この段階が八つに分かれています。そしてこの段階の中に「初心」という言葉も出てきますが、実は初心とは最初の段階ではないのです。私たちは普通初心を最初、と考えていますが、そうではないのです。初心の前に「入門」という概念があります。そして入門の前にまだ「^{しどう}志道」という事が言われているのです。

つまり第一、一番初めの段階は、その道に志す、「志道」という事です。そ

の道に志す、つまり入って見よう、求めて見ようと思いを向ける事です。そこで初めて「入門」という事になります。そして入門した結果しばらくして、その道の最初の部分、「初心」が分かり身についてきます。初心の段階が過ぎた次の段階が「未熟」です。良く謙遜して未熟者と言いますが、これでいくとそんな謙遜でもないわけです。未熟の上が「熟練」です。熟練の上が「上達」です。大分上達したと言いますが、上達は熟練より上なのです。その上「精妙」あるいは「絶妙」なのです。熟練して、上達してもまだ不十分で、その業^{わざ}は精妙にならなければならないのです。

* 第6回課題：剣道講話「正念相続」(p.90-99)を読み、上記の解説とともに学業、クラブの修業に如何に生かせるかを考えなさい。

7 憐れみ

- 柔和な人たちは幸いである、彼らは地を受け継ぐであろう。

聖書 マタイによる福音書 5章5節

- 憐れみ深い者は幸いです、その人は憐れみを受けるからです。

聖書 マタイによる福音書 5章7節]

- 憐れみとは、愛と同情が一つになったもので、相手の気持ちを、自分の気持ちとすると言う。激しさ、荒々しさを越えて、柔らかく、円く、穏やかに相手の立場を考えられる者が、自己に勝ち、悪に勝ち、人を殺す剣を人を生かす剣に変えられる。一刀流の究極は円満である。

小野派一刀流宗家解説

- 流露無碍

小野派一刀流極意

[1997 年度前期宗教週間笹森 建美宗家のメッセージ]より抜粋

小野派一刀流 独妙^{どくみょう} 剣一水

独妙とは、妙も、絶妙をも越えたものという意味です。水は、最も柔らかで、最も強いものです。中国の孫子の教えの中にも、水は小石をもよけて流れるけれど、ひとたび力を持てば岩をも押し流すとあります。水とは不思議なものです。水は自分ではどんな形をも持たず、方円の器に従う、応適自在^{おうてきじざい}の性質を持

っています。器が丸ければ丸くなり、四角であれば四角くなります。水は低きにつき、どこへでも^{しんとう}浸透していきます。そして万物を生かし、万物を育てます。山合いの水滴は、地に^{ひそ}潜んで^{わきみず}湧水となり、小川となり、川となり、海に注ぎ、大海となります。

独妙剣の技は、この泉、流れ、川、海の心で行えと教えられます。今までの全ての技を含みながら、一番柔らかで、^{おだや}穏やかな技なのです。穏やかさの中に、力が潜んでいます。本当に強いものは、静かで穏やかなものなのです。一刀流では、自分が形を作って相手を倒そうとするのではなく、相手に任せ、相手を包み込んで行きなさい、自らは光り輝く存在であっても、それを固持せず、低きについて行きなさい、そうすれば自然に相手が引き下がるものだと教えています。一刀流では、この技を、最も靈妙な技であり、我々自身も、靈妙な存在となり、一切の悪に勝ち、自分自身にも勝ちなさいと教えます。そこへ到達する為には、自己主張をやめ、宇宙の真理に思いを合わせ、自ら力があっても柔和なものとなり、平和な穏やかな者となりなさいと、説いています。一刀流の極意は、柔らかく円くなのです。

旧約聖書のイザヤは救い主なる、みどり子の預言に際し、「靈妙なる義士、大能の神、とこしえの父、平和の君」(イザヤ9：6)と言っていますし、パウロも「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくある事を固守すべき事とは思わず、かえって、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜った。」(ピリピ2：6～9)と述べています。

自分を捨てて、無になる事それが大事なのだと、キリスト教も、武道も説いているのです。一刀流では、このことを、逆説的に、強くなるより、弱くなる事を、勝つことより、負ける事を学びなさいと教えています。負けるべきときに、穏やかに、上手に負けられる人、それが達人なのです。キルケゴールという人は、「精神的意味において、成長するという事は、大きくなるという事ではなく、小さくなる事を意味する。神の前に無になる時、それが至高の信仰の行為である事は言うまでもない。たいていの人間の不幸は、彼らが弱すぎるのではなく強すぎる、つまり神を認めるには余りにも強すぎるという事にある。」と言っています。

イエス様も「人に仕えられる者ではなく、仕える者になりなさい。自分を捨

てる事の出来る人、その人が、神の国に入れる。」と教えています。イエス様は、荒々しく、権力ある者が、世を支配している現実の中で、柔和な者が地を継ぎ、柔和に勝る者が憐れみだと教えられました。

憐れみとは、愛と同情が一つになったもので、相手の気持ちを、自分の気持ちにする、隣人と経験を分かち合うという事で、喜ぶ者とともに喜び、悲しむ者とともに悲しむ事です。イエス様は、神の子でありながら、人となり、私たちの喜びを喜びとし、悲しみや、苦しみも共にして下さり、私たちの負い切れない罪を、神様にとりなしをして下さいました。それが神の憐れみ、神の愛なのです。憐れみとは、人を救い、人を生かす働きです。剣の道を修業する者も、激しさ、荒々しさを越えて、柔らかく、円く、穏やかに、相手の立場を考えられる者が、自己に勝ち、悪に勝ち、人を殺す剣を、人を生かす剣に変えられると教えられます。武道の目的は、この世の悪を断ち、人々が平和に生きられるようにする事にあります。私は、小さいころから、父に剣を教えられましたが、父はよく柔らかく、円く剣を使いなさいと教えていました。ですから、私も、一刀流だけでなく、教師としても、円満な授業の出来る教師になるようにと願っていたわけです。しかし、これもこれで終わりではなく、更に次の段階に序があるわけですから、絶妙な授業は決してごまの擦り過ぎではなく、「早く円満な授業の出来る教師になりなさい。」と、励ましを受けたのだと私は受け止めたわけです。剣の道では、「志道」から「円満」まで、常に関連が有り絶えず初めに戻り、また上を目指し^{とどこお}滞る事なく前進しなさいと教えています。聖書で、「神が完全であられるように、あなたがたも完全な者になりなさい。」と勧めていますが、信仰のあり方として剣の教えと同じ事を言っているのだと思います。すなわち、我々に「神になれ。」とか、「神のようになれ。」と言っているのではなく、「常に清新さと、純粋な、素直な心を持ちつつ成長を続け神に近づく者となり、また神と人ともに奉仕する円満な信仰を持ちなさい。」と教えているのです。すなわち「神を畏れ、神を敬い、神を愛し、品節のある信仰を持ち、^{けんきよ}謙虚さと、愛と、誠実さを持って神に近づきなさい。」の教えです。柔らかく、円い人格と憐れみに満ちた信仰を持つ事が^{かんよう}肝要なのだと思います。主イエスは、心の清い者、柔和な者、憐れみのある者は、幸いであると言われています。そうした人々は、神を見、地を継ぐ事が許されるのです。

今の世の中は、荒々しく、刺とげし、悲しい事が多すぎると思いませんか？

清くある事、優しくある事、他人に心を配る事を忘れ、自分が得をし、自分が権力を握り、自分さえよければと、自分の事しか考えられない人が多くなり、世の中を支配しているのが原因だと言わざるを得ません。こんな世の中、良くしたいと思いませんか？ その為には、勉強のほかに、ぜひ、武道と信仰の道を求めて下さい。

剣道時代 1999 4月号 五格一貫 より

万水映月（ばんすいえいげつ）

一刀流仮字目録に“水月之事”とある。これは稽古に当たって相手に対する時の心境の理を説くものである。

まずその水の心だが、わが心が水のように清く澄み、風なく静かであれば、満月は円く、三日月は細くと、それぞれの月影を宿して手に取るように明らかである。しかし水が濁って波立つと、月影は清らかならず、また定かならず、形乱れて映る影は千々に砕けて捉えることができない。

剣道もまさしくこれと同じである。相手に対し、攻めようともせず、また防ごうともせず、平然^{こんぜん}渾然と相手を見れば、相手の形色がことごとくわが心の鏡に映る。もし相手を打つことだけに心が騒ぐなら、心が一所に凝って肚が抜け、相手の思惑もわからず、かえって相手に乗せられる。また防ぐことのみで心が捉われれば、われは死物となり、当然、相手の姿を見抜くことはできなくなる。

従って、心は澄んで静かであることが大切である。心がそうであれば、われより烈しく懸る間にも相手の応変がただちにわが心に映り、守るときにも相手の隙が見えて瞬時に打ち込むことができるものである。わが心を静かな水のように養い慣れさせることができるなら、常に真如^{しんじゆ}の月が映るように応変自在の活動ができ、勝たぬということがないのである。

月の心、これは稽古に際しわれは月のような心となって相手を一体に見下ろすということである。

月は中天に懸かって山を照らし谷を照らし、野を照らし家を照らし、草木を照らし人を照らす。これを照らし、あれを照らさぬということはなく、昭々として万物を照らすのである。

その月と同じように、われは相手を照らす。相手の形相をことごとく照らす。そして相手に隙があれば瞬秒の間をおかず直ちに打ち込む。それは障子を開く

るやいなや、座敷に月の光が射し込むのと同じである。かりそめにも孤疑の心を起こし、渋り滞るところなどあってはならないのである。

しかし月が曇れば、地上を照らすことはできない。剣道でいえば、われに邪念妄想があると相手の実相がわからない。これと同じである。相手がわからないということは隙があってもそれが見えないということである。

また月が欠けるように、わが心に欠けたところがあると光が薄くなる。これも曇りと同じことで、相手がよく見えないということになる。

このように考えると、いつでも皓々たる満月が晴天に輝くような心境を養って相手と対し、そして相手の実相をよく見て、明るく真っ直ぐな技を出す稽古が大事だとわかる。常に真如の月をわが心とすることを学ぶべきである。

そして万水映月の教えだが、万水の”万”はあらゆるという意である。明月は到る所として照らさざるものがない。また水あればそのことごとくに映る。大海に映じ、湖沼河川に映じ、水鳥の嘴振る水にも葉露にも映ずる。大に映じ小に映じ、動に映じ静に映じて洩らすところがない。われはその月ともなり水ともなることが大事である。相手が面を望むのが見えると、われより小手にいき、あるいは突きに出る。また相手から突いてくれば交わして払い、面なりを襲う。出れば迎え、逃げれば追う。つまり相手の心の微妙を知ってわれより即刻これに応えるのである。

稽古の初めのほどは、相手の体や竹刀の動きが見えてからこれに応じて打突をかけるものだが、熟達してくると相手の体が未だ技を出さずとも、その心気が微かに動いたところで、ことごとくわが心に映るものである。それには常に不動の心を養わなければならない。

不動の心、それは危機に臨んで心気転倒せず、しかも邪念妄想の去った動かない心、揺れない心である。勝とうとか、負けまいとの欲望を捨て、心の暗雲を取り去り、ただ真心をもって稽古にいそしむのでなければ得られるものではない。

この不動心が養われ、そこに初めて万水映月の境地を知るのである。

そしてこの境地を知ったなら、相手との一体のこと、和のことに思いがいく。自分が相手の月となり水となるのである。自分が月とすれば相手は水である。相手の水に月の自分が映る。そしてそれはまた、そっくりその逆に立場を変える。

相手の目を見れば、その目にわが姿は映し出され、そこに勝負を超えて、互いの和の心が見えてくるのである。

流露無碍を志す（りゅうろむげ）

一刀流組太刀の技の稽古では、体と技の凝り固まりをほどこき、柔らかく大きく素直になることを学ぶ。すなわち流露無碍を志すのである。氷をとかして水となし、岩を砕いては粉となし、方円の器に従い、敵のどんな隙にも流れ入って滞りがないようにする。敵の架（構え）の働きに従って打ち出す大刀の向うの勢いを流しそらし、われから進んで柔らかかに勝つのである。もしわれが勝気を強くし、日を剥き肩をいからして、ただ敵を打とう、われは打たれまいと力みを出すと、わがなすことは兎角の色に出で、敵に取り付いて心が動き、角張って^{つか}悶え行き詰まり、そこを敵から乗ぜられる。だからすべて敵に取り付かず居付かず、無為無心となって一刀を滞りなく繰りかえし繰りかえして打ち流し、丸く柔らかく遣い馴れることである。そうすれば、われと敵とは一体になり、正しく勝つべきところにわれ勝ち、流儀の極則たる流露無碍の妙域に達することができるようになる。

* 第7回課題：上記の解説及び一刀流極意「独妙剣」(pp.257-259)を読み、憐れみの本質について考えなさい。参考文献 「剣と禅」p.159～も参考にせよ。

8 仕える

- あなたの方で、人の先に立ちたいと思う者は、みなしもべになりなさい、人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためである[マルコ 10:44, 45]

聖書 マルコによる福音書 10章44～45節

- そこで、あなたがたのうちでいちばん偉い者は、仕える人でなければならない、だれでも自分を高くするものは低くされ、自分を低くするものは高くされるであろう。

聖書 マタイによる福音書 第22章11～12節

- しかしあなたがたは、そうであってはならない、かえって、あなたがたの中で、いちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである。

ルカによる福音書 第22章 26節

いかなる流派においても、また現代の剣道形においても、勝ちをおさめる方に「仕太刀」または同意の字を当て、先に技を出して負ける方を「打太刀」と言う。また打太刀が師の位で、弟子の仕太刀にその境涯を教えるのである。勝ちをおさめるのに仕える太刀というのは一見矛盾があるように思えるが、各流派の剣理を次世代、次々世代へと確実に伝えてゆくには、師が身を呈して確実にその剣理を弟子に体得させる以外にない。聖書 ヨハネによる福音書 第13章 3～17節を読んでみよう。

13:3 イエスは、父がすべてのものを自分の手にお与えになったこと、また、自分は神から出てきて、神にかえろうとしていることを思い、

13:4 夕食の席から立ち上がって、上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって腰に巻き、

13:5 それから水をたらいに入れて、弟子たちの足を洗い、腰に巻いた手ぬぐいでふき始められた。

13:6 こうして、シモン・ペテロの番になった。すると彼はイエスに、「主よ、あなたがわたしの足をお洗いになるのですか」と言った。

13:7 イエスは彼に答えて言われた、「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」。

13:8 ペテロはイエスに言った、「わたしの足を決して洗わないで下さい」。イエスは彼に答えられた、「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」。

13:9 シモン・ペテロはイエスに言った、「主よ、では、足だけではなく、どうぞ、手も頭も」。

13:10 イエスは彼に言われた、「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなのだから。あなたがたはきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない」。

13:11 イエスは自分を裏切る者を知っておられた。それで、「みんながきれいなのではない」と言われたのである。

13:12 こうして彼らの足を洗ってから、上着をつけ、ふたたび席にもどって、彼らに言われた、「わたしがあなたがたにしたことがわかるか」。

13:13 あなたがたはわたしを教師、また主と呼んでいる。そう言うのは正しい。わたしはそのとおりである。

13:14 しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである。

13:15 わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしは手本を示したのだ。

13:16 よくよくあなたがたに言うておく。僕はその主人にまさるものではなく、つかわされた者はつかわした者にまさるものではない。

13:17 もしこれらのことがわかっていて、それを行うなら、あなたがたはさいわいである。

伝統や教えはよほどの覚悟で献身し、伝えてゆく覚悟を持たねば、立ち消えてしまう。その意味において三百年を超える道統が脈々と現代まで継承されている小野派一刀流、柳生新陰流は驚異でもある。さらにキリストの教えはほぼ全世界に広がり、聖書はベストセラーである。如何に弟子たちさらにそれに続く宣教者たちが、主の心理に仕えたかを物語るものである。

*** 第 8 回課題：武士道 第 9 章「忠義」と、旧約聖書 創世記 22 章 1～14 節の物語を対比し、自分の考えをまとめなさい。**

9 巖の身 - 宮本武蔵の剣理

- × 目には目を、歯には歯を[マタイ 5:38]

聖書 マタイによる福音書 5章38節

- × あなたの隣人を愛し、あなたの敵を憎め[マタイ 5:43]

聖書 マタイによる福音書 5章43節

- 剣術 / 剣法の概念

- 諸流派 いわゆる「^{せつにんとう}殺人刀」一つ一つの場面に応じた刀法。

- 孫子 「兵は^ま詭道(あざむくこと)なり」

- 自分の技量を頼み相手を圧倒して勝つ。

「五輪の書」^{いわお}巖の身

- 太陽、傾斜、床柱を背に、刀長を計る等々

宮本 武蔵 「独行道」

現代剣道と古流の違いはどこにあるのか。柳生新陰流二十一世柳生延春氏は

「現代剣道にはルールが有り、古流にはルールがない」と説明されている。つまり、戦国時代実際に自身の刀を振り回して、生死を決する斬り合いに於いては、ルール無用、相手を倒した方が勝ちという、非常に明快な基準しかあり得ないのである。卑怯とか奇襲とか言ったものも、自分の命には代えられない戦法であったのである。孫子は「兵は詭道(欺くこと)なり」と説くが、その通りである。たとえば無外流むがいりゅうの形には顕著にその古流の面影が残っている。当流には峰打ちはない。

剣豪とうたわれる宮本武蔵。しかし彼の出生は諸説あり、確定的なことは不明である。かれは人生に六十余度真剣勝負をし1度も負けた事が無い。しかしその最後の勝負は彼が三十数歳であったとされる。これは一体何を意味するのか。多くのスポーツマンが経験する引退という事を意味するのである。彼の剣理はその場その場における技法を追及したもので、いわゆる「殺人刀」にあたる。従って、時刻、温度、場所の状況、太陽の位置、相手の獲物、人数、敵の真理等々を利用し、如何に自分を物理的に優位に立たせることができるかに心血を注いだものである。しかし如何に鍛えようとも、自己の体力、筋力には限界があり、また衰えが年齢とともに生じる。従って自ら引退の時を知り、以降は実戦を避けたのである。圧倒して勝ちをおさめる「巖の身」の剣理には限界があると言うことに他ならない。一方柳生新陰流、小野派一刀流の宗家たちはさらに高い次元の「普遍の勝」を模索し、大成させた。

*** 第9回課題：宮本武蔵は最後の真剣勝負に勝ちを得た後、どのように自分の剣理を理解し、更なる大成へと昇華させるべく努力したかを検証せよ。**

資料1 愛の剣道によせて 北海道教育大学名誉教授 廣川 正治
剣道時代 1999 11月号 宮本武蔵現代への伝言
剣道日本 2000 8月号 宮本武蔵と現代剣道

10 息

- その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった

旧約聖書 創世記 2章7節

- 数息観 / 呼吸即心、心即呼吸

直心影流法定の形

この「いのちの息」は GOOD NEWS BIBLE では

'Then the Lord God took some soil from the ground and formed a man out of it; he *breathed life-giving breath* into his ^{鼻 孔}nostrils and the man began to live.'

となっていて、さらに明確に「命を与える息を吹き込まれた」となっている。大和言葉は動物を指して「いきもの」というがこれは文字通り「呼吸するもの」ということであり、「呼吸する」ことが、とりもなおさず、「生きる」ことであると考えられてきた。この呼吸のことを古い日本語では「い」といっていたらしく「いのち」とは「いのうち」つまり「呼吸する間」という意味だという説がある。西洋も日本も同様観念を持っていたことになる。英語で「動物」を意味する animal は元来ラテン語で「呼吸」を意味する、anima から派生したものである。「鹿」の deer は古英語では野生の獣一般を意味していたが、これも「息」という意味で、森で狩りをしていたゲルマン人から見ると、走り回っている野生の動物の特色は、荒い鼻息を吐くものとしてのイメージがあったのであろう。このレベルにおいては人間と動物との間に差異はない。動物に与えられた「息 = breath」と人間に与えられた「命の息 = life-giving breath」の違いがその根元的な差異を生み出すのである。英語ではこの「命の息」を spirit という単語で表わしている。これは「^{スピラレ}呼吸する」というラテン語の動詞から出たもので元来は文字通り「呼吸」の意味であった。よく礼拝で、牧師が「神と、子と、聖霊のみ名によって祈ります。アーメン」と祈るが、この聖霊は Spiritus Sanctus(聖なる息)である。ちなみにジーニアス英和辞典で意味を引いてみると「(名詞)精神、心、霊、靈魂、神霊、聖霊;幽霊、亡霊、悪魔、(小)妖精、気分、精神状態;快活、元気、気力、気迫、勇氣、熱情気質、気性、心的態度、真意、意図、趣旨、忠誠心、蒸留酒、火酒、(動詞)人を元気づける、励ます、人・物を...からひそかに連れ[持ち]去る」と実に多様な意味へと拡張が見られる。もちろん剣道においても重要な要素がたくさん含まれていることに気づく。よく選手宣誓で「剣道精神に則り、正々堂々と試合を行います」などというが、この精神がつまり spirit であり、全ては「呼吸」から始まっているのである。

[この項は渡辺昇一著「英語の語源」講談社現代新書 1977 を参考にさせていただいた]

- * 第 10 回課題：剣道講話「剣道と呼吸」(pp.210-221)及び、剣道時代 1997 1月号 真人の呼吸の特集を読んで、呼吸と死生観について「大死一番 大活現前」(p.27)と言及された所を理解しなさい。
- * 「百回稽古」 註 54 出ず入らずの息、同註 55 英山老師の第二期・数息感・一炷香、同註 73 想蘊・行蘊・一息截断の息 「剣と禅」p.232～を参照せよ。

11 心

- 最後に、兄弟たち、すべての真実なこと、すべての誉れあること、すべての正しいこと、すべての清いこと、すべての愛すべきこと、すべての評判の良いこと、そのほか徳と言われること、称賛に値することがあるならば、そのようなことに心を留めなさい。

聖書 ビリビ人への手紙 4章8節

- この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。

聖書 テモテ人への第1の手紙 1章5節

- 其れ剣は心なり、心正しからざれば剣また正しからず。すべからく剣を学ばんと欲する者は先ず心より学ぶべし

剣士 島田虎之助

多くの剣道の指導書、並びに先人の教えの中に引用される文言である。「剣道は格闘技である。従って何よりもまず勝つことに意義があり、それが至上命題である」と考える者にとっては、とかく技量、業の遅速などに注意が注がれ、心のあり方などは低次元の関心事となってしまう傾向が強く感じられる。ここでもう一度この言葉を述べた、島田虎之助について考えてみたい。彼は人生七十年も八十年生きた聖人君主のような人物ではない。鹿児島の出で、一刀流を習い江戸に出た。若い頃は相当のきかん坊であったとも言われている。男谷門下で修行を積み大成し、勝海舟の師として、剣道と人の道を教えた人物として有名である。しかしながら三十九歳の若さで早世したのである。その島田がいみじくも「剣は心なり」と喝破しているのである。従ってこれは決して単なる

美辞麗句ではない。男谷下総守門下で激的な稽古を積み、学問も修めた彼が、最終的に見いだした剣道の本質なのである。現在剣道を志す者は今一度その真意を深く顧みなければならない。剣道は「心に始まり術で終わる」とは小野派一刀流十七代笹森宗家の言であるが、まさに始点である心の修行を求めるべきであると強く思うのである。

打突の意義から心を探る

現代剣道と古流の違いはどこにあるのか。第9回講義 巖の身で一部述べたとおりである。つまり柳生新陰流二十一世柳生延春氏は「現代剣道にはルールが有り、古流にはルールがない」と説明されている通りである。

ところが時代が変遷し平和な時代が到来、防具が発明された。現代剣道の防具の発祥を概観すると、一刀流五代小野次郎右衛門忠一が江戸中期、宝暦・明和（1751～1771）の頃発案ということになる。江戸時代に入り、大阪夏の陣（1615）以降に本当に実戦で刀が交えられた事例はほとんどない。例外的に有名な忠臣蔵の討ち入り（元禄15年/1702）があげられる程度である。防具・竹刀の発明により打突部位が定められ、それ以外の部位を打っても有効打突とは認められなくなった。ここから本当の意味での^{きりあい}截相がなくなった。是非論はある。つまり竹刀剣道の弊害である「あてる」剣道が横行し出したことである。しかし竹刀剣道であるが故に、単に勝敗に混泥することなく、本当に相手の心を打って勝ちを納めることの価値が創出されたと捉えたい。現代剣道に於いて防具を着用し、竹刀を用いて稽古・試合に臨む以上、仮に打突されたとしても生命を奪われる危険性は全くない。従って一本の技を繰り出すのが非常に軽々で、とりあえず打ってみよう、などという行為が横行するのである。ましてや審判基準がある以上、当たれば取らざるを得ない。無論「気・剣・体の一致」とは言われるが、特に低学年または初心者・初・二段クラスの試合に於いては、まだまだ「気・剣・体の一致」など望むべくもなく、また試合の進行を促す為にも有効打突と認めてしまう。その結果不十分な打突に価値が生まれ、指導者も本人も、またそれを見守る保護者もその間違った価値を求めてしまうようになるのである。極論であるが未熟な修行段階における試合は、すればするほど剣道の本質から求道者をそれさせてしまう諸悪の根元のように思えてならない。昨今この弊害を認め、試合内容・着装・態度など違った角度から勝敗を判定す

るような事も模索されているようであるが、それとても勝敗を決する以上その規則・基準に従った試合内容を作り出すという、違った弊害を生み出すのではないかとさえ思えてくるのである。全日本剣道連盟の試合ならびに審判規則は相当の字数に及ぶ。また細則も非常に事細かい。しかし規則を作れば作るほどそれを満たしつつも、姑息な試合が次から次へと生まれてくるのである。審判基準は本来単純明快なものである。「相手の心を打ったかどうか」そしてそれは当事者同士が決めるべき事なのである。まず第一に剣道に何を求めるのか、そのこの所、つまり出発点たる原点を見誤ってはならない。

* 第11回課題：ルールを守りつつ正しい剣を目指すことの難しさは、何をもって克服できるか。聖書マタイによる福音書 5章20節 「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、決して天国に、はい入ることはできない」の律法学者やパリサイ人の考える義(=正義=ルール)を守って試合をする事の是非を考えよ。また聖書は「わたしが律法や預言者を廃すためにきた、と思っはならない。廃すためではなく、成就するためにきたのである。よく言っておく。天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もすたることはなく、ことごとく全うされるのである」(マタイによる福音書5章17・18節)と述べているが、律法の成就とは何かを考えよ。

1.2 知恵のむなしさ

- 「わたしは知者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむないものにする」

聖書 コリント人への第1の手紙 1章18節

- 「知不有知慮不有慮竊識而化骨、化骨識矣」

「心に因り氣に因る者は未だしなり、心に因らず氣に因らざる者も未だしなり、

知りて知を有たず、慮って慮を有さず、竊に知りて骨と化す、骨と化して識る。」

『闘戦経』

われわれの持っている知識、常識、先入観とは一体何か。日常生活してゆく中で、われわれは自分の持つあらゆる知識、経験を通して日々生活を行っている。その場その場に応じて、自分の判断する最良の選択を繰り返しながら時を過ごしているのである。自分の持つ標準/スタンダードとはこれまでに身に付

けてきた、それら知識によって構築されたものなのである。しかしながらあらためてこの知識とは何かをよく吟味する必要がある。常識は、単に地理的、時間的に限られた環境の中でのみありえる。つまりわれわれの暮らしているこの地域社会において常識的なことは、他の社会においては非常識となりえ、また現代における常識は過去においては常識ではなかったことも多いのである。つい百年前までは、人間が空を飛ぶことは常識ではなかった。コンピューターや通信機器の未発達な時代にあっては、現代のさまざまな出来事が、即時に全世界に配信される状況は常識では考えられなかった。遺伝子工学の目覚ましい発展は、臓器の再生に止まらず、生命の再生をも可能にしつつある。マンモス復活プロジェクトしかり、クローン技術しかりである。すでにさまざまな分野において、これまでの常識は常識でなくなってきた。剣道においても一般の常識が通用しないことが多い。先に打突のモーションを起こしたほうが時間的、空間的、物理的には有利に思えるが、実際にはむしろ捌かれ、打たれることが多い。肉体機能的には絶頂期にある高校、大学生が、老齢の先生に手も足も出ない。ここにもパラドックスは存在する。コリント人への手紙 4 章 18 節には「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」とある。ある本校の高木先生は「縦じま飼育のネコ」の講演で、ある脳性理学者が「われわれが見えていると考えているものは、実はわれわれが過去に見た経験のあるものを脳が認識しているに過ぎない。見たことのないものはわれわれには見えていないのである」と言及されている。常識は実は常識ではない。見えないものの中にこそ真理がひそんでいるのである。

* 第 12 回課題：資料 2 剣道時代 特集 「愛の剣道」対者は師、鏡なり 及び 月間 武道 2000 4月号 知不有知慮不有慮 を読み、その説く所をまとめなさい。また聖書 テサロニケ人への第 1 の手紙 4 章 13～18 節のような聖書の個所を現有するわれわれの常識から判断するとどうなるか、またそれについて常識の是非を考えよ。

13 修行と救い

- あなたがたの救われたのは、実に、恵みにより、信仰によるのである。それは、あなたがた

自身から出たものではなく、神の賜物である。

エペソ人への手紙 2章8節

■ 洞山五位の公案 正中編、編中正、正中来、兼中至、兼中到

一刀正伝無刀流 高上極意五点

このように聖書のみ言葉と剣の教えは不思議なほどに調和と整合性を持つ。

明治に入り、1873年(明治6年)キリスト教が解禁となる。青森県に東奥義塾高等学校がある。前身の東奥義塾では、すでに解禁の直前から米国人宣教師が英学の教師として招聘され、バイブルクラスなどで生徒を教えていた。その学生14名がジョン＝イング宣教師から洗礼を受けたのが契機となり、弘前教会が設立される。小野派一刀流16代宗家ならびに剣道範士である笹森順造は、9歳のころよりこの教会に通っている。父、母、兄弟も同教会で受洗。クリスチャー一家となる。この教会に日本メソジスト教会初代監督および東奥義塾第2代塾長となる本多庸一があり、順造師を教導するのであるが、やはり小野派一刀流を修めている。本多はさらに東京にある青山学院の日本人初代院長にも就任する。その後青山学院は建学の精神を受け継ぐため第7代院長として笹森順造を招聘することとなる。ミッションスクールの院長が小野派一刀流の宗家であった訳である。後に笹森は政界に入り国務大臣などを歴任するのであるが、新聞記者から「あなたは清潔すぎる」と言われたほど清廉潔白な人柄であった。後を嗣いだ17代宗家笹森建美氏も青山学院チャプレンとして奉職されたが、今は駒場エデン教会の牧師を務められている。礼拝と一刀流の稽古が同じ場所で行われる、多分日本で一つしかない教会であろう。このほかにも例えば、聖学の山鹿素行の子孫にも多くのクリスチャンがおり、牧師となっている人も何人も出ている。

キュルケゴールは「精神的意味に於いて成長すると言うことは、大きくなると言うことではなく、小さくなることを意味する。神の前に無になるとき、それが至高の信仰である事は言うまでもない。たいていの人間の不幸は、彼らが弱すぎるのではなく強すぎる、つまり神を認めるには余りにも強すぎるということにある」と述べている。剣の達人は、聖書に触れることなく、普遍の勝利は自分の弱さを自覚することであるという極意を、悟っていたのである。歴史に「もし」は禁物であると書いたが、もし江戸時代に布教が自由になされていたら、多くの道場に、神棚ではなく、十字架が掲げられていたかもしれない。

ところで、これまで見てきたように、武士道を実践した者たちにとって、キリスト教の教えは多大な感化を与えた。それではキリスト教に触れなかった、またはその教理を深く考えることのなかった者たちにとってはどうであったのであろうか。一例として一刀正伝無刀流を開き、劍禅一致を唱えた山岡鉄舟を考察してみよう。彼は一刀流より一刀正伝無刀流を開いたが、その道場である春風館での荒稽古はつとに有名である。彼は常に劍禅一致を説き、一刀流の高上極意五点から、洞山五位の公案を透過して無刀流五点を作った。妙劍、絶妙劍、真劍、金翅鳥王劍、独妙劍をそれぞれ、正中編、編中正、正中来、兼中至、兼中到に当はめ修行の段階を示した（劍道講話 p.70～ 及び p.257～ / 百回稽古 p.26～ 第4回 及びその註 34 参照）。その内容は最初の正中編を過ぎるだけでも、相当の稽古が必要である。山岡鉄舟は「苦修三年の捨身稽古で備わる」と言っている。さらに次の編中正の段階までは、何とか壮絶な修行を積み重ねれば到達しえる可能性があるが、その先のいわゆる利他にでる兼中至以上の段階は、ほとんど常人には不可能のように思える。持田盛二範士十段は小川忠太郎範士九段に「小川さん、劍道でそこそこへいけるかもしれないよ」と語ったとされる。劍道には十段以上はない。これまで4名の劍士が拝受したのみである。その十段範士が七十歳を過ぎた所で、「自分もまだだめではあるが、いけるかもしれない」と語る修行の到達点である。常勝を求めて修行に修行を重ねても、山岡鉄舟の考えるその奥義、兼中至、兼中到、一刀流では金翅鳥王劍、独妙劍の位には到達し得ないのである。小川範士はこの兼中至、兼中到を利他の境涯と述べている。修行に修行を重ねても、利他の境地に至ることは難しいのである。2000年10月6日の数紙の夕刊に9日間にわたって断食・断水・不眠・不臥「四無行」満行という記事が載っている。詳細は別紙資料を参照されたいが、その中で彼は「これからは布教という利他の段階に移る」と述べている。千日回峰という大峰山を片道24kmの修験道を歩く行を成し遂げた者にだけ、この「四無行」は許されるそうで、彼は9年の歳月を費やして回峰を成し遂げ、この度の「四無行」に臨み、満行したのだそうだ。戦後3人目とのことである。その修行の壮絶さは筆舌には尽くせないと思うが、その人物でさえ、これからは利他の修行と言うのである。

同じ一刀流の同じ教えである、高上極意五点ではあるが、笹森宗家がチャペルメッセージ集において解き明かしておられる勧めとは趣を異にしている。思想的

には共通する事柄があるが、そこに至る修行の里程が異質なのである。難行苦行の修行によって到達すべき境地と、キリストによる購いによって生きることは、奇しくも外面的には同じ事となるのである。問題はどちらの方法をとれば、多くの人々が救われるか、ということになる。

話は少し変わるが、鎌倉時代、明恵という高僧がいた。華嚴宗を修め、京都・高山寺を創建したことで知られる。彼は高雄の神護寺で修行を深めるにつれ、僧が俗心にまみれ、戒律をないがしろにする仏教の荒廃に幻滅させられた。そこで23歳の折、故郷の紀州白上の峰に隠遁の庵を編み、そこで自らの耳を切り落とす。「形ヲヤツシテ人間ヲ辞シ」てしまったのである。(明恵上人樹上座禅像 / 朝日新聞 2000年9月24日日曜版 参照)。明恵は釈迦の説いた仏教の原点へ回歸し、厳しい戒律を課した自力本願のみを救済の道とした。一方同時期に法然は「選択本願念仏集」を著し浄土宗の開祖となる、それを親鸞が受け継ぎ浄土真宗を開く。その教えるところは難行苦行に耐えることなく、ひたすら念仏を唱えれば極楽浄土へ往生を遂げられるというものである。いわゆる他力本願である。明恵は1212年すぐさま「^{さいじやりん}摧邪論」を著して「選択本願念仏集」を論破している。民衆にとっては念仏集の教えのほうが受け入れやすく、隆盛を誇ることとなる。一方、華嚴宗は明恵以降、彼のようなカリスマ的な魅力を備えた指導者にも恵まれず、衰退を余儀なくされるのである。僧が戒律をおろそかにすることに明恵は幻滅したとあるが、実はそれは聖書にもある通りである。聖書は「人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す(ヤコブの手紙 1章 14・15節)」とある。そしてこの罪を自覚させるものが戒律 = 律法なのである。考えてみれば修行僧もそうであったように、してはならぬという戒律 = 律法 = 法律の項目は、自分の中にある欲望がしてみたいと思う事柄ばかりである。そしてより強く犯してみたいと思う項目ほど、罰則の程度が強い。

ここでもう一つ考察すべきことがある、それでは、浄土(真)宗はひたすら念仏を唱えれば極楽浄土へ導かれると説く、これが最も楽で、自利の多い考え方なのであるか?しかしそれを信じるためには、熱心に法然、親鸞の説く「選択本願念仏集」なる書を読破し、またそれが正しいと自分で確信できなければそこには全く説得力が無いのである。当時の民衆の知的レベルからすれば、非常にわかりやすく、またありがたいものであったかもしれないが、意味も十分には分から

ない題目を唱えるだけで、果たして浄土にいけると信じるに足るものがあったのであろうか？それは法然、親鸞のカリスマ的な人格か？しかし後世その人物を見たこともない人々は、では一体、どのように信じたのか？「疑いつつも妥協をもって信心を持った」と言ったレベルが多かったのではなかろうかと思うのである。

- * 第13回課題：武道をどのような価値観をもって志すのか、また武道を修めることによる究極的な救いは期待できるのかを考えなさい。
- * 「武道、いわゆる武士道とキリスト教・笹森 建美著」の4 内村鑑三の場合に言及されている「接木論」について所感を述べよ。資料「内村鑑三全集抜粋」を参照せよ。

14 死の克服 / 義の諸相

- 死は勝利にのまれてしまった。死よ、おまえの勝利は、どこにあるのか、死よ、おまえのとげは、どこにあるのか、死のとげは罪である、罪の力は律法である。

コリント人への第1の手紙 15章55・56節

- わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリストイエスによって捕えられているからである。

ピリピ人への手紙3章12節

- 我らが人生のたいていの問題は武士道をもって解決する、正直なること、高潔なること、寛大なること、約束を守ること、借金せざること、逃げる敵を追わぬこと、これらのことについて(武士道が)キリスト教を煩^{わづら}わすの必要はない。我らは先祖伝来の武士道により、これらの問題を解決して誤らない、ただし神の義につき、未来の審判につき、そしてこれに対する道につき、武士道は教うる所がない。

内村 鑑三

第13講まで私たちは、普遍の勝、つまり永遠の命を保つために、剣の宗家たちがどのように考え、模索し、修行を積んできたかを考察した。しかし13講でも問題となったように、永遠の命を考えると、避けて通れないのが「死」をどうとらえるかという問題である。多くの剣士たちがこの解決ができないままに、

その生涯を終えてしまったのではないかと思われる。最終講ではその説きあかしを試みてみたい。

内村鑑三は「一旦信仰を受け入れながら、信仰を離れる者は、意志が脆弱な者である。この問題を含め、我らが人生のたいていの問題は武士道をもって解決する。正直なること、高潔なること、寛大なること、約束を守ること、借金せざること、逃げる敵を追わぬこと、これらのことについて(武士道が)キリスト教を煩わすの必要はない。我らは先祖伝来の武士道により、これらの問題を解決して誤らない」と言う。「ただし神の義につき、未来の審判につき、そしてこれに対する道につき、武士道は教うる所がない」と述べている。また新渡戸稲造は著書「武士道」の中で、その将来に言及し、「(明治 32 年の)今や武士道の時代は終わろうとしている。これに対抗できうるだけの強力な道德体系は、ただキリスト教があるのみである」と吐露している。

ここで我々は義について考察しなければならない。まず武士道という義とは何か。それは正義と同意と言ってもよい。しかし義理と混同してはならない。義理とは本来「正義の道理」を意味したが、時代の変遷とともに、「義務」という意味合を強く持ってしまった。新渡戸はこの点を指摘する。「義理は義から出て、はじめはその元の意味から、わずかにしか離れていなかったが、次第に離れていって、ついには世俗間で誤り用いられるようになり、本来の意味は曲げられてしまった。(略)義理をこのように理解するとき、(略)義理は道德における、第二義的な力であるに過ぎず、動機としてはキリスト教における愛の教えと比べると、著しく劣っている。愛は律法なのである」とし、愛から出た正義ではなく、義理 = 義務 = 律法が動機となっている行動を取るならば、その場は卑怯者の巢と化してしまっただろうと結論づけている。(この「愛は律法なのである」との訳は誤解を招くおそれがある。これは須知得平氏によるものであるが、原文は It is a secondary power in ethics; as a motive it is infinitely inferior to the Christian doctrine of love, which should be the law. となっており、下線部を補訳すれば、「このキリスト教の教理における愛こそが、律法でなければならない」となる) これは聖書が「律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とせられないからである」(ローマ人への手紙 3 章 20 節)と説くのと同じ事である。ここに「神の義につき武士道は教うる所がない」という内村の言葉がクローズアップされる。内村は武士道の義はすべてではないにせよ、多くの場合本来の義からそれ、義理の

要素の強い行動を強いていたのではないかと考えているのである。それでは神の義とは何か、我々を死の恐怖から解放する神の義とはどのようなものなのか。その答えは聖書ローマ人への手紙5章12節以下に明確に記されている。

5:12 このようなわけで、ひとりの人によって、罪がこの世にはいり、また罪によって死がはいってきたように、こうして、すべての人が罪を犯したので、死が全人類には入り込んだのである。

5:13 というのは、律法以前にも罪は世にあったが、律法がなければ、罪は罪として認められないのである。

5:14 しかし、アダムからモーセまでの間においても、アダムの違反と同じような罪を犯さなかった者も、死の支配を免れなかった。このアダムは、きたるべき者の型である。

5:15 しかし、恵みの賜物は罪過の場合とは異なっている。すなわち、もしひとりの罪過のために多くの人々が死んだとすれば、まして、神の恵みと、ひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物とは、さらに豊かに多くの人々に満ちあふれたはずではないか。

5:16 かつ、この賜物は、ひとりの犯した罪の結果とは異なっている。なぜなら、さばきの場合は、ひとりの罪過から、罪に定めることになったが、恵みの場合には、多くの人々の罪過から、義とする結果になるからである。

5:17 もし、ひとりの罪過によって、そのひとりをとおして死が支配するに至ったとすれば、まして、あふれるばかりの恵みと義の賜物とを受けている者たちは、ひとりのイエス・キリストをとおし、いのちにあつて、さらに力強く支配するはずではないか。

5:18 このようなわけで、ひとりの罪過によってすべての人が罪に定められたように、ひとりの義なる行為によって、いのちを得させる義がすべての人に及ぶのである。

5:19 すなわち、ひとりの人々の不従順によって、多くの人々が罪人とされたと同じように、ひとりの従順によって、多くの人々が義人とされるのである。

5:20 律法がはいり込んできたのは、罪過の増し加わるためである。しかし、罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた。

5:21 それは、罪が死によって支配するに至ったように、恵みもまた義によって支配し、わたしたちの主イエス・キリストにより、永遠のいのちを得

させるためである。

6:1 では、わたしたちは、なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであろうか。

6:2 断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておれるだろうか。

6:3 それとも、あなたがたは知らないのか。キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしたちは、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。

6:4 すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである。

6:5 もしわたしたちが、彼に結びついてその死の様にひとしくなるなら、さらに、彼の復活の様にひとしくなるであろう。

上記の聖書のメッセージを正確に理解し、納得する事ができれば、死を克服することができるのである。

聖書に言う「死」はアダムによってもたらされた。神は人を創造されたとき、その命については限界を考えてはおられなかった。しかしエデンの園にあったリンゴの実を食べたことにより、善悪を知るものとなり、神のようになってしまったのを見られて、人に死を賜った。チリから作られた者なので、チリに帰ることとされたのである。しかし注意すべき事は、命の息を吹き入れられたその息すなわち、spirit を土に返すとは言われていない。Spirit は永遠のものであるとしている。さらにこの spirit を吹き込まれたのは人間だけである。このようにして肉体的な死と罪は、常に人につきまとうものとなった。つまりこれは神と人とのねじれた関係である。しかし神は人を愛され、この関係を正常なものに修正するために、一人子であるイエス・キリストをこの地上に送られた。イエスは罪を犯すこともなく、義に満ち、つまり神との正しい関係を示され、さらに、十字架上の死によって、罪に満ちた私たちと、神との関係を取りなして下さったのである。それでは、死の意味と、永遠の命についての奥義を知った者はどうすれば良いのか。まず「その奥義が真である」と確信できるかが大きな問題となる。「あなたがたは、

聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである」とイエスは語られた。(ヨハネによる福音書 5章 39節)一人でも多くの人が、聖書を通して、その奥義が真であることが悟れば幸いである。そしてもしそう確信できたならばどう生きて行けば良いのか。その答えも聖書にある。「わたしがすでにそれを得たとか、すでに完全な者になっているとか言うのではなく、ただ捕えようとして追い求めているのである。そうするのは、キリスト・イエスによって捕えられているからである」という聖句に従って生きて行けば良いのである。

山岡鉄舟にいう兼中至、兼中到との違いは何か？それは自己が定めた到達点を難行苦行をもって修行をし、追い求めていくのではなくて、イエス・キリストと同じになるという到達点に、イエス・キリスト自身がとらえて下さり、導いて下さるといふ点なのである。

もう一度笹森宗家のメッセージに戻ろう、

「ただ武道はすばらしいものですが、残念ながら、救いはありません。武道は人間の可能性を示してくれますが、同時に限界も示します。修業を積んだ人ほどそのことを知っています。武道では人のどうする事も出来ない限界、肉体と、^{たましい}魂の死と、^{ほろ}滅び、罪から教われないのです。学問もそうです。ですから前に述べたように、多くの武道を志した者達が、信仰を求めたのです。人の救いは、イエス様の愛を通して、神様から与えられるものなのです。その事を知り、人々に伝える為にも、繰り返しになりますが、学問や、武道と信仰を、そしてまず信仰を求めて下さい」

現代社会に生きる我々にとって、^あ敢えて剣道やその他の武道の修行を通してこの境地に至る必要はないし、また神の義については武道を通しては至ることができない。それにしてもコンピューターをはじめとする文明の^{らんじゅく}爛熟期にあって、ともすれば科学万能のように思える環境の中に生きている事が、「自分が弱い存在である」と言うことを悟るのを難しくしているように思えてならない。

* 第14回課題：聖書にいう、「死よ、おまえのとげは、どこにあるのか。死のとげは罪である。罪の力は律法である。しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。死は勝利にのまれてしまった」をどう理解すればよいのか、真の「死

からの勝利」とは何かを考えなさい。